

心臓手術数において、20年近くにわたり、日本一を記録する病院がある。榊原記念病院である。その中でも7000例以上の執刀経験を持ち、98.7%という成功率を誇るのが、高橋幸宏医師である。高橋医師は、卓越した技量を見せ合うのが真のチームワーク、単なる仲良し集団であってはならないという。以下に高橋医師のお話を紹介する。

心臓手術はチーム医療といわれます。執刀医、助手、麻酔医、器械出し看護師、体外循環技士が寄り集まって、それぞれが獲得した卓越した技量を見せ合うことができるからチーム医療と呼ばれるのです。だから当然、それぞれの技量が臨床的有効性という結果に繋がらなければ、チーム医療とはいえません。

別に相手を気遣うことだけがチームワークをよくするわけではありません。技を見せ合うというのは、お互いに批判し合うことでもあります。「あの時にはあれをやっちゃダメだよ」という話が出ればこちらのものです。それは手術がわかっているという証拠だからです。

大きなミスは誰でもわかるかもしれませんが、「ここをこうやればもっとよくなったはずだよ」という話をスタッフが始めたら、これはチームとして熟してきたと考えていいかもしれません。

もちろん、お互いに仲が良いというようなことも必要です。喧嘩するような関係にある人は手術に入るべきではありません。そういう良好なコミュニケーションができるようになる秘訣は、何度も述べてきたように、長く手術室に在ることです。

お互いのスキルを批評できるようになると、いちいち会議室に集まって反省し合う必要はなくなります。だから、各人は突出した技量を獲得するように、また高いレベルでチームの一員となれるように努力する必要があります。

高橋医師は、手術室で起こるすべてのことはビジネスの現場でも活かせるという。私は、教育の現場でも、その多くを活かすことができると考える。さらに、高橋医師のお話を続ける。

良好な人間関係をつくるには、その場にいることが何より大事です。コミュニケーションを取りたくても、その場にはいない人とは取れません。どんなに嫌でも最初は上司のコピーをしなくてはなりません。

私は手術中に何度も同じ失敗をする若手には「出ていけ！」と怒鳴りつけます。でも、そう言われて本当に手術室から出ていくようではダメです。執刀医が「出ていけ」と怒鳴るのは一つのルーティンみたいなものです。そして、怒鳴られても出ていかないというのも若手にとってはルーティンなのです。

怒鳴られても出ていかないという経験をもっている方もいることだろう。怒鳴られて本当に出てしまった方もいるかもしれない。今の世の中、若い方で、怒鳴られても出ていかない、若手にとってのルーティンがわかっている人は、どのくらいいるだろうか。このことがわかっていると、最強のチームの一員にはなれない。